

令和 2 年 6 月 27 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K06760

研究課題名(和文) 織豊系城下町の空間形成に関する建築・都市史的研究

研究課題名(英文) Historical study on the formation of Oda-Toyotomi administration type castle town

研究代表者

登谷 伸宏 (Toya, Nobuhiro)

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・准教授

研究者番号：40447909

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、織田・豊臣政権の建設した織豊系城下町に注目し、その形成過程と歴史的特質を解明することを目的とした。研究を進めるにあたっては日本海に面する小浜城下町をとりあげ、織豊政権期における城下町形成の過程と空間構造を明らかにした。さらに、織豊系城下町の空間的な特徴を明確にするため、聚楽第を中心とする城下町形成における寺社の位置づけを検討するとともに、京都近郊の権門寺社とその門前集落が形成する都市的な場との比較を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、織豊政権の城下町については、織田信長、豊臣秀吉の建設した城下町がおもな研究対象となり、政権を構成する家臣団の建設した城下町の空間的な特徴には検討が及んでいなかった。それに対して、本研究では、信長、秀吉の家臣の城下町である小浜をとりあげ、その形成過程、空間構造について検討した。これにより、これまで明確でなかった織豊政権期の小浜城下町の空間構造を明するとともに、織豊系城下町としての空間的な特徴を解明できた。また、その成果は、現在小浜において積極的に進められている歴史を活かしたまちづくりに有益な情報を与えることができると考える。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to reveal the characteristics of Oda - Toyotomi administration type castle town. In the study I focused on Obama castle town, and reveal the process of castle town construction and its spatial structure in Oda - Toyotomi administration period. In addition to clarify the characteristics of Oda - Toyotomi administration type castle town, I considered 2 themes; 1st was the relation between Jurakudai castle town construction and religious buildings around it, 2nd was the difference between the castle town and religious settlements which were consisted on traditional temple and shrine and its town.

研究分野：日本建築・都市史

キーワード：織豊政権 城下町 空間構造 寺社

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまで、織豊系城下町の成立については、小島道裕らの研究が大きな影響を持ってきた。すなわち、主従制にもとづく給人居住域と「楽」の属性を持つ市町からなる戦国期城下町の二元的な構造が、織田信長の安土城下町において克服され、両者を空間的・社会的に統合した一元的な織豊系城下町が実現された、というものである。そして、こうした学説にもとづき中近世移行期における城下町の変容が論じられ、その類型化が進められた。

しかしながら、近年、織豊系城下町の空間・社会構造について見直しが進むとともに、新たな知見が積み重ねられたことにより、上記の説に対しても以下の疑問点や解明すべき課題を指摘することができる。

- (1) 小島が一元化を達成したとする安土城下町は、新たな史料の発見によって、惣構により城下町を空間的に区分する二元的な構造を有したことが明らかとなった。仁木宏はかかる二元的構造が信長の城下町の到達点だと指摘する。現時点で、安土城下町の先駆性には疑問が投げかけられており、織豊系城下町の形成とその諸段階について、さらに議論を積み重ねる必要がある。
- (2) 東国の戦国期城下町の空間構造を分析した市村高男は、当該期の城下町は給人居住域・市町だけでなく、寺社集中地区など多元的な要素から形成されるとした。こうした特徴は織豊系城下町にも当てはまる可能性が高く、二元性という織豊系城下町成立の前提条件について改めて検討する余地がある。さらに、小島は、安土城下町は中世以来の港町を空間的に解体しないままその一部として包摂したとするが、なぜ信長は既存の港町を解体しなかったのか、どのようにそれを城下へと包摂したのかについては触れていない。これらは統合・包摂される地域社会の実態をふまえて解明すべき課題である。
- (3) (2)においてとりわけ研究の立ち遅れているのが、城下町形成における寺社の動向である。先行研究では、織豊系城下町の建設が進むなかで、寺社は宗教統制・城下町防衛のため城下へ集中させられたとする。だが、こうした指摘はあくまで権力側の視点からのものであり、戦国期城下町における寺社集中地区の実態、寺社が地域社会の核として果たした役割などその自律性をふまえた議論は活発ではない。したがって、都市(町場)に居住する商工業者とともに、寺社の動向に注目し織豊系城下町の形成を考察する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、以上の研究状況と課題をふまえ、織豊系城下町の空間形成の諸段階と、その空間構造の特質を明らかにするため、以下の3つの課題について検討することとした。

織豊系城下町の形成過程と類型化

本研究では、自身がこれまで進めてきた織田政権の城下町に関する研究で得られた城下町類型、すなわち空間的に給人居住域と市町とが区分されるものの、給人の一部が市町にも居住する「移行期町郭外型」を織田政権の城下町類型として設定する。その上で、織豊系城下町の形成過程について改めて検討し、織豊政権期における城下町形成の諸段階を明らかにする。

織豊系城下町建設における中世都市の空間的継承について

織豊系城下町の建設は大きく①既存の中世都市(町場)を空間的に解体し新たに城下町を建設する事例、②都市(町場)を解体せず城下町の一部として統合・包摂する事例に分類できる。本研究では、両者の違いが既存の都市(町場)の都市としての成熟度によるとの見通しのもと、織豊系城下町建設に先行して地域の所在した都市(町場)の空間的・社会的特質を解明する。その上で、城下町に統合・包摂される地域社会の側から織豊政権による城下町形成について論じる。

織豊系城下町形成における寺社の位置づけについて

本研究では、寺社の地域社会の核としての機能に注目し、織豊系城下町形成以前の地域社会における寺社の配置、地域社会における機能の実態、都市(町場)との関係などを検討する。それにより、織豊政権の城下町建設による地域社会の多元性の再編と、それに対する寺社の動向を解明する。

3. 研究の方法

本研究では、織豊政権により建設された織豊系城下町に焦点を絞り、上述の～について検討を行った。その際には、以下の手順により研究を進めた。

まず、織豊政権の建設した城下町に関する先行研究を改めて分析し、先行研究の成果と課題を洗い出した。ついで、各自治体の発行した自治体史を利用して史料の収集を行うとともに、各地域の図書館・博物館など史料所蔵機関においても、文献史料・絵画史料の調査・収集を進めた。さらに、必要に応じて城下町の現地調査を行った。

その一方で、城下町形成をより広い視野から理解するために、中世・近世の政治・社会構造、信仰のあり方、既存の都市の空間・社会の様相などを、文献史学・考古学・歴史地理学の成果をもとに整理した。

また、以上の作業を通して得られた情報をデータとしてPCに入力し、研究支援データベースの構築を行った。

4. 研究成果

本研究では3で述べた方法により研究を進めることにより、以下にみるような研究成果を得た。

なお、(1)で述べる小浜城下町の空間構造については、論文としてまとめたものの、2020年3月以降各地の図書館や史料所蔵機関が閉館したため最終的な史料の確認ができなくなり、6月の時点で学術雑誌に投稿していない。

(1) 織豊期における小浜城下町の空間構造

本研究では、織田・豊臣両政権による城下町形成の諸段階を解明するため、分析対象とする城下町の条件として、④中世において政治的・経済的に発展していた都市(町場)であったこと、⑤両政権により織豊系城下町への改変が行われたことを設けた。その上で2つの条件に合致する都市(町場)を絞り込み、若狭国の小浜を対象として選び出した。

戦国期の小浜城下町 中世の小浜は西津・小浜という2つの港を中心に形成された日本海の港湾都市であった。また、港からは京都や丹後をつなぐ街道が延びていた。

西津は、14世紀には政治的・経済的機能を併せ持ち、15世紀には守護一色氏が守護代所を置いたことがわかる。一方小浜は、砂州上に展開した町場へ多くの商工業者が集住した。14世紀以降には町場に小路名がいくつも確認できるようになる。さらに、小浜には多くの寺社が建立された。後瀬山の麓には小浜八幡宮が鎮座し、港や街道周辺には町場に居住する商工業者の信仰と関わって、時宗、浄土宗、日蓮宗の寺院が集中したと考えられる。

大永2年(1522)、守護大名武田氏が町場に隣接する後瀬山の麓に居館を構え、山上に後瀬山城を建設した。これ以降、小浜は武田氏の城下町として位置づけられたといえる。武田氏の居館は内郭と外郭からなっており、内郭には当主の居館、外郭には被官の屋敷や宿所が位置した。さらに、内郭・外郭ともそれぞれ堀を備えていたと考えられる。このように、戦国期の小浜は、堀を巡らせた武田氏の居館に隣接して既存の町場が位置しており、給人居住域と市町とが離れて所在する戦国期城下町とは大きく異なる空間構造を形成したことがわかる。

織豊政権期における城下町の変容 天正元年(1573)、若狭国は織田政権の支配下に置かれ、重臣丹羽長秀の所領となった。しかしながら、長秀の本拠は近江国佐和山城であり、小浜には一部の家臣のみが常駐したと考えられる。そのため、長秀が領主であった時期には目立った城下町の改変は行われなれず、武田氏の城下町の空間が維持された可能性が高い。

天正10年に長秀は越前国へ転封となり、同13年に子の長重が若狭国へ入部するまで、小浜は羽柴秀吉の家臣が代官として支配したとされる。その間に武田氏の設けた居館の外郭は撤去され、町場へと変化したと考えられる。

天正15年、豊臣秀吉の奉行を務めた浅野長吉が若狭国へ入部した。長吉が行った城下町形成の詳細は史料的な限界から明らかとならないが、小浜八幡宮の社地、有力商人の屋敷地を移転させ、山麓の居館周辺に武家屋敷を集中させたと考えられる。これにより居館・家臣団の屋敷と、それに隣接する町場という緩やかな区分が行われ、小浜は織豊系城下町として成立したとすることができる。その一方で、長吉は町場の中心部に対してほとんど手を加えておらず、町屋のなかに寺院が混在する都市空間は武田氏段階のままであった。小浜は、武田氏の支配のもとで給人居住域と市町とが隣接する織豊系城下町と非常に似た空間造を持っていたとはいえ、豊臣政権下、とりわけ政権の中枢にあった奉行の城下町においても、再編が必要最小限に留められたことが明らかとなった。

その後、慶長5年(1600)若狭国へ転封となった京極高次は、西津と小浜の間に新たな城郭を建設し、小浜では、武家屋敷の城郭付近への集中、町場の拡張、寺社の後瀬山麓への移転を行うなど積極的な城下町の再編を進めた。これにより小浜城下町は近世城下町として成立したとすることができる。

(2) 中近世移行期における権門寺社の構の空間構造

本研究では、織豊系城下町の空間構造の特質を明らかにするため、中近世移行期に建設・改造が行われた都市(町場)との比較を行うこととした。そして、史料の残存状況を鑑み、ここでは権門寺社とその門前集落を比較対象として選び、その空間構造について検討を行った。

吉田社の構 吉田社は吉田山に位置する。山腹に大元宮・本宮などが点在し、西麓に領主吉田家の屋敷が所在した。さらに、吉田社の門前には南北に分かれて2つの集落が所在し、戦国期にはこれらを囲繞するように堀が掘られていた(=吉田構と呼ぶ)。吉田構の内部には吉田家の屋敷、社家の屋敷、地下人の屋敷が混在しており、吉田家の屋敷の周囲にはさらに堀が設けられた。こうした構の構築・維持は吉田家が担っており、実際の普請などは地下人が夫役として行ったと考えられる。

醍醐寺の構 醍醐寺は笠取山の山上・山下に伽藍が位置する。山下の下醍醐は金堂・五重塔などが所在する伽藍中心部(=寺中)と、それに隣接して多くの子院が集中する地区(=寺家)からなる。さらに、その西側に南北に走る奈良街道沿い、および寺家の南北に門前集落が形成された。集落には地下人とともに、下級の僧侶や院家に仕える坊官・被官の屋敷が混在した。

慶長期の醍醐寺には、寺家と集落を限るように堀が掘られるとともに、集落全体を囲繞する惣構が設けられていたことがわかる。このうち寺家との境の堀は、所領の住人が夫役として動員されて構築された。一方、惣構については、慶長期に醍醐寺が維持管理を行った形跡はなく、醍醐郷の住民が担っていたと考えられる。

このように、中近世移行期において吉田社・醍醐寺はともに、社殿、または堂塔の所在する社

地・寺中の外側に、領主の屋敷や寺内を圍繞する堀と在所を包摂する惣構とを二重に設けていた。こうした特徴は、東寺や本圀寺といった洛中の寺院の構とも共通しており、京都の大規模な寺社の空間構造の特徴とすることができる。

(3) 織豊系城下町形成における寺社の位置づけについて

本研究では、織豊政権が城下町において寺社をどのように位置づけたのかを論じるため、織豊政権、とりわけ豊臣政権による寺社造営の実態について検討を行った。そのなかで、注目したのが、いわゆる京都改造の一環として造営された東山大仏殿である。

豊臣政権による寺社の造営 豊臣秀吉は、自らに武力で対抗する寺社に対しては討伐を行ったが、一方で新たな寺院の創建するとともに、自らに従う寺社に対しては積極的な援助を進めた。前者の代表として東山大仏殿が挙げられる。後者については厳島神社、春日大社、東寺、醍醐寺などがある。さらに、秀吉の子秀頼の代には所領の寺社を中心にその再建が急速に進められた。また、こうした寺社造営は豊臣氏の女性たちによっても積極的に担われた。

東山大仏殿の造営 秀吉は京都を、聚楽第を中心とした城下町へと改造する過程で東山大仏殿の造営に着手した。秀吉は天正14年(1586)に木材の調達を開始するとともに、大仏殿の図面を作製させている。造営が本格化したのは同16年からであり、木材調達、伽藍予定地の地築が行われた。さらに、天正19年になると秀吉は高野山の客層であった木食応其に造営の統轄を命じ、造営は急速に進むこととなった。文禄2年(1593)には大仏殿の上棟が行われ、同4年には完成したと考えられる。

木食応其の造営の特徴として以下の点が挙げられる。第1に、配下の奉行や工匠を現場に投入するとともに、諸国から動員された多数の工匠を造営組織へ編成し造営を進めたことである。第2に、木材の伐採現場で部材の加工まで行う、現在のプレファブリケーション工法に近い工法を用いたことである。これらは応其が単独で行うことはできず、秀吉の関白政権としての実力により初めて可能となったと考えられる。すなわち、従来の寺社造営をはるかに超える規模でこれらの手法が用いられたことが、秀吉による寺社造営の特徴とすることができよう。

豊臣政権による寺社造営とその技術 豊臣政権の寺社造営の特徴として、寺社の再興に建物の移築や修理といった手法を多用することが挙げられる。移築の事例としては比叡山西塔転法輪堂として移築された園城寺金堂、紀伊国湯浅から移築された醍醐寺金堂がある。とりわけ後者では、移築の際に立て登せ柱の使用というそれまでの寺社建築にはあまりみられない手法が用いられた。

一方、修理の事例は非常に多くあるが、そのなかで特徴的なものとして醍醐寺五重塔、東寺講堂がある。前者は木食応其が修理に関わっており、工匠を大量に動員することによりごく短期間で修理を行った事例である。後者では、短期間に修理を行うため、破損した部材を繕い、金物などで補強した上で再用するという手法が用いられた。

さらに、豊臣政権、とりわけ秀頼の寺社造営の特徴として、大仏殿造営で用いられたプレファブリケーション工法の多用、組分けによる工匠の編成がみられる。大仏殿の造営においては、木材の伐り出しと部材への加工がほぼ同時に行われたが、秀頼による醍醐寺の如意輪堂などの造営では、大坂の大規模な加工場において部材への加工が行われている。

また、現場における工匠の編成についても、豊臣氏の工匠、応其配下の工匠、寺社に直属する工匠などさまざまな出自を持つ工匠がいくつかの「組」に分けられ、建物をそれぞれ部分的に担当していたことがわかる。

このように、豊臣政権は政権に協力的である寺社に対して堂舎の造営など援助を行った。小浜においても、浄土真宗の寺院を含め、領主から禁制や所領の安堵を得ており、小浜八幡宮では社地の移転にともない、浅野氏によって社殿の造替が行われている。また、豊臣政権期には寺社造営の手法や技術が大きく変容したといえよう。今回の研究では、こうした手法・技術が織豊系大名にどの程度影響を及ぼしたのか、城下町形成において用いられたのかどうかについて確認することはできず、今後の詳細に検討していく必要がある。

(4) 織豊政権による城下町の形成過程について

以上の検討から、中世都市(町場)を包摂して建設された織豊系城下町の形成過程について分類を行えた。まず、織田政権の城下町形成においては、①安土城下町や北庄城下町のように、信長および家臣団の本拠となった城下町と、②小浜城下町のように本拠とならなかった城下町では、建設手法に大きな違いがあることが明らかとなった。前者は「移行期町郭外型」の城下町へと再編されるのに対し、後者においては城下町に常駐する家臣が少数であったため、「移行期町郭外型」への再編が必要なかったとすることができる。

また、小浜城下町では、浅野氏の本拠となってからも大規模な城下町の再編は行われず、浅野氏の居館周辺に家臣団の屋敷地を設定するために神社、町屋の移転が行われたただけであった。これまで、秀吉政権期には各地の大名が「豊臣大名マニュアル」にしたがい城郭の造営を行い、それにともない城下町を領国の経済的拠点とするため、領内の町場からの商工業者の移住を進めた。その結果、多くの城下町が織豊系城下町へ変容したと考えられてきたが、小浜の場合そうした大規模な変化があったのは、関ヶ原の戦い後に領主となった京極氏の段階であった。したがって、秀吉政権期における織豊系城下町の形成は一様に進んだのではなく、これからは大名と政権との関係、城郭と既存の都市との関係を前提条件として組み込んだ議論が必要となると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 登谷伸宏	4. 巻 5
2. 論文標題 豊臣政権の寺社造営	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都橘大学文学部 歴史文化ゼミナール 京都 人とモノの再発見	6. 最初と最後の頁 40-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 登谷伸宏
2. 発表標題 豊臣政権による大仏殿の造営とその特質
3. 学会等名 平安京・京都研究集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 「都市の危機と再生」研究会編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 406
3. 書名 危機の都市史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----